リレー随筆

ウガンダの空の下で揺れた“当たり前”

今村総合病院 研修医2年目　安田 幸志郎

学生の頃，ウガンダをバックパックで回りました。大冒険というほどではありませんが，あの５週間は確実に自分の“当たり前”を揺さぶりました。せっかくなので，あの時のことを思い出しながら筆をとってみます。

原点は小学校の道徳の時間

きっかけは小学生でした。担任の先生が少し型破りな方で，教科書に留まることなく自分の知らない世界を映像で教えてくれました。ゴミ山で暮らす子，マンホールで寝る子，戦場に連れていかれる子どもたち。自分が思っている“当たり前”が当たり前ではない世界があるということを幼いながらに感じました。

大学に入ると，「自分の目で直接見たい」という思いが強くなってきます。フィジー，インド，マレーシア，香港，韓国。そして，2018年の夏，アフリカに行きたいという思いから選んだ国はウガンダでした。治安が悪すぎず良すぎない国，英語圏，そして子ども兵の現状を直接知ることができるということが決定打になりウガンダへの渡航を決めました。

準備，ゆるすぎ問題

準備は……いま思うと甘かったです。荷物はリュック一つ，合計７kg。なのにそのうち４kgがエイサー（沖縄の伝統芸能）の太鼓と小型スピーカーでした。

お金は現金５万円のみ。クレジットカードはありませんでした。５週間いて５万円。ウガンダの物価は思った以上に高く，２週間でほぼ全額なくなりました（笑）。詳細は割愛しますが，多くの人の助けがあってなんとか旅は乗り切りました。まさに若気の至りで，危機管理能力は低く，なんくるないさー精神の塊でした。さすがに臨床の現場では危なすぎるので，しっかりと危機管理できるように頑張ります。

ただいま，アフリカ大陸

鹿児島空港→香港空港→アディスアベバ空港（エチオピア）→エンテベ空港（ウガンダ）。乗り継ぐたびに周囲の人種の顔ぶれは変わっていきました。アフリカ大陸上空を飛んでいる飛行機から見た窓の外には広大な赤い大地が広がっていました。飛行機を降りた瞬間，むわっとした熱気と土の匂いが顔にまとわりつきました。そして，アフリカ大陸に

足を踏み入れた瞬間に感じた地の鼓動には興奮しました。五感すべてで感じるアフリカ大陸は，何か自分の心が解き放たれたような感覚までありました。700 万年前，人類の祖先はアフリカ大陸で生まれたといいますが，私の中に眠る私の魂は祖国に帰ってきたような感覚だったのかもしれません。

Silas との奇跡的な出会い

この旅のキーパーソンはサイラス（Silas）でした。SNS のコメント欄から DM をくれた，三つ年上の青年です。渡航直前，エボラのニュースで周囲がざわつくなか，SNS で現地の状況を尋ねた私の書き込みに，「ウガンダは安全だ。来いよ」と連絡をくれたことが最初の出会いでした。

とりあえず流れでビデオ通話をすることに。とても明るくよく笑う青年で，アフリカを変えたいという思いから街の清掃活動や学校での保健活動を仲間とやっているということでした。「俺の家に泊まればいいよ」。その一言で，滞在の拠点が決まりました。今思えばこれまた危うさもありましたが，この出会いが私のウガンダ旅の運命を左右したのでした。

旅

交通手段はボダボダ（バイクタクシー）とタクシー（ウーバー），たまにレンタカーでした。ナイル川の源流があるジンジャ，赤道をまたぐことができるポイント，キリンや象など多くの野生動物が生息する広大なサファリ，そしてタンザニア国境に近くにあるアフリカエイズ発祥の地といわれていたラカイ，南スーダン国境近くのグルに行きました。観光だけではなく，孤児院や障がいのある人の施設，元子ども兵の社会復帰を支える団体，大学や病院を訪ねました。また，ストリートバスケットや街中でのフリーハグ（love&peace をテーマに街中で出会った人とハグをする），エイサーの演舞の披露といった活動で交流を広げたり，JICA や国連，大使館で働く日本人たちとも交流させていただいたりしました。

ウガンダの B 級グルメ！

食はすぐ馴染みました。バカ舌とよく言われるので参考になるかはわかりませんが。主食はとうもろこし粉を練ったポショ，蒸したバナナをつぶしたマトケです。なかでも屋台の“ロレックス”は毎朝の楽しみでした。時計ではなくて，rolled eggs のなまりです。チャパティ（ナンを薄くしたような生地）にオムレツ，刻んだトマトと玉ねぎ，キャベツを巻きます。シンプルなのですが，病みつきになりました。日本で店出しても，絶対に流行ること間違いないです。

宗教

日本との圧倒的な違いといえば宗教でした。ウガンダは人口の約84％がキリスト教，約12％がイスラム教，約２％が土着宗教です。挨拶で「君は何教？」って聞かれることがよくありました。私が「無宗教に近い」と答えると，かなり驚かれました。「無宗教」という概念がよくわからなかったそうです。毎週日曜はSilasと教会へ。教会といえば物静かでパイプオルガンがあるイメージがありましたが，ウガンダの教会は質素な建物の中で，みんなで笑いながら歌って踊って，そして牧師が熱くメッセージを語るというものでした。１週間程滞在したエイズ孤児施設での話です。日の出前に外から子どもたちの歌声が聞こえてきました。肌寒い中外に出てみると，施設の子どもたちがみんなで歌って踊っていました。毎朝やっているそうです。それくらい熱心でした。そしてある事件が起きました。その施設での最終日の晩，私はその施設のスタッフに彼らが信じている教えについて熱く語られました。そして，「信じるか信じないかは君次第だ。信じるか？」と。専門的な英語を話され，何を言っているのかわからなかった私は，流れのまま「Yes」と答えました。すると，ぞろぞろと他の人たちも集まってきて儀式が始まりました。よくわからないですが，何かに入信したことになったようです（笑）

元子ども兵との出会い

子ども兵について聞いたことがあるでしょうか。渡航先として私がウガンダを選んだのは子ども兵について知りたい思いがあったのが大きな要因です。

子ども兵について簡単にお話します。1980年代から20年以上，ウガンダでは内戦が続きました。1990年代半ば以降，ウガンダ北部では反政府組織「神の抵抗軍」による村の襲撃や子どもの誘拐が多発し，この内戦で，少なくとも10万人以上が犠牲になったといわれています。一緒に活動していたSilasの親戚もその被害を大きく受けていました。そのウガンダ内戦でもとりわけ注目されているのが，子ども兵の問題でした。内戦中，反乱軍である「神の抵抗軍」は，戦力を補強するため毎晩のように村や避難民キャンプを襲い，子どもを誘拐，訓練に参加させ，強制的に兵士として戦わせました。ウガンダ内戦では推定３万人の子どもが誘拐されたと言われています。「神の抵抗軍」は子ども兵を洗脳するために，自分の手で，肉親や兄弟，親戚を襲わせ，その恐怖感から絶対服従させていたそうです。内戦中の子ども兵は，水汲み等の雑用から，政府軍との戦闘や村の襲撃，中には地雷原を渡る際の“人間地雷探知機”として利用されるケースもあったといいます。内戦が終わった今，元子ども兵たちの社会復帰支援を手伝う日本の民間団体がありました。その団体こそが今回私たちが訪問したNGO「テラ・ルネッサンス」です。幼い頃から子ども兵として活動させられてきた子どもたちの多くが精神的・肉体的なトラウマを抱え，社会復帰するのに困難な状況に置かれています。また，戦うことしか教えられてこなかった元子ども兵たちは，基本的な教育も欠如しており，職業技術もありません。こちらの団体では，元子ども兵たちが仕事を始めるために必要な職業技術，識字・計算能力な

どの能力向上のための訓練を行い，個々人に合わせた形で心理社会支援活動を行っています。かなりセンシティブな空間でもあるので，私たちのように短期訪問者は施設利用者と直接話すことは禁止されており，訓練の様子を見学させていただいたり，現地スタッフの方々とお話をさせていただいたりしました。小学校６年生の時に動画を通じて初めて知った子ども兵。画面の先の話かと思っていた人たちが今自分の目の前にいる。じっと我々訪問者を見つめる彼・彼女らのまなざしが忘れられません。そして，私は日本に生まれたくて生まれたわけではないし，また，この子たちもこの環境に生まれたくて生まれたわけではない。自分が生まれた環境が余りにも恵まれた環境であることを知ると同時に，等しく尊いはずの“命”が生まれた環境によって扱われ方が違う現状があるこの不条理に，いてもたってもいられなくなったことを覚えています。

歴史的背景

そもそもなぜこのような子どもたちが生まれるような環境が生じてしまったのか。その一つの原因はヨーロッパがアフリカを植民地支配していた時代に遡ります。19 世紀中頃から進められたアフリカ探検によって，アフリカ大陸に眠る豊富な資源に注目が集まると，資本主義が始まっていたヨーロッパ諸国は新たな資源の供給先としてアフリカに目を向けました。ここから植民地支配が始まります。1884 年ベルリンに集まったヨーロッパ諸国によってアフリカ大陸は分割され，植民地支配が始まります。アフリカには様々な民族の人々が暮らしていますが，ヨーロッパ諸国がアフリカを分割する際は民族の分布は無視され，紙の上だけで行われました。そして，この植民地時代にヨーロッパがアフリカに持ち込んだのが“分断統治”であり，この分断統治こそが，植民地から独立した後のアフリカで“民族紛争”が勃発する大きな原因になりました。例えばウガンダを支配していたイギリスは，ウガンダ南部に暮らす民族を優遇する一方で，北部に暮らす民族を虐げてきました。南部に暮らす民族にウガンダ全体の自治権を与え，その結果北部の民族から多くの税金をとるなどの分断が生じました。この分断政治によって虐げられていたウガンダ北部の人々の不満は，植民地支配をしていたイギリスではなく，優遇されていたウガンダ南部の人々に向けられるようになりました。これがイギリスの目的でした。つまり，あえて内部分裂させることで，その宗主国であるイギリスに反乱を起こさせないようにしていました。これはウガンダに限らず，アフリカ諸国で用いられてきた方法です。ツチ族とフツ族が争ったルワンダ大虐殺を聞いたことがあるのではないでしょうか。この内部分裂も実は同じような歴史的背景があります。そして，イギリスから独立した後のウガンダでは，植民地時代に虐げられていた北部から反政府組織「神の抵抗軍」が誕生し，植民地時代に優遇されていた南部を中心とする政府軍との間で内戦が勃発。３万人以上の子どもが反政府組織に連れ去られ，子ども兵士として戦わされてきた背景がありました。

無力感，そして決意

小学生の頃から人一倍正義感が強く，困っている人を見捨てられないタイプでした。だからこそ，世界で苦しむ人たちに対して何か自分にできることがあるなら見つけたい――そう思ってウガンダに来ました。

しかし，数々の社会問題，そしてその裏にある歴史を知った私は，自分の小ささを痛感しました。まだ学生で，お金も知識も影響力もない。それでも，自分の無力さを認めることが，今思えば大きな一歩だったのだと思い

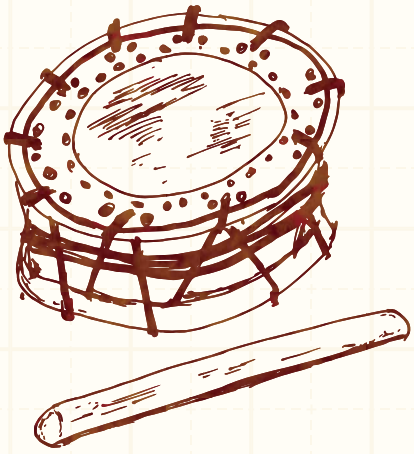
ます。

そんな時に出会った言葉が「桃李成蹊」でした。桃や李の木が何も言わずとも人を惹きつけるように，人としての深みや徳を備えた人のもとには自然と人が集まる，という意味です。

まだ芽のような存在ですが，目に見えないところでしっかりと根を張り，人としての厚みを少しずつ育てていきたい。そして，いつか誰かに何かを与えられるような人間になれたらと思います。

アフリカを救う――そんな大きな夢を語っていた自分もいましたが，今は，目の前のことに誠実に向き合うことこそが自分の出発点だと感じています。小さな一歩の積み重ねが，いつか新しい道をつくってくれるはずです。

ウガンダの旅を振り返り，当時の気持ちを久しぶりに思い出しました。まだまだ未熟な私ですが，あの空の下で感じた想いを胸に，小さくても，自分にできることを一つ一つ積み重ねていきたいと思います。

次号は，今村総合病院 / 塩盛 一晃先生のご執筆です。

（編集委員会）